

《平成 27 年度日本薬剤学会「薬と健康の週間」
懸賞論文審査結果》

テーマ：「学生からみた今の薬剤師国家試験」

第 1 席：村田俊介（慶應義塾大学薬学部）

「学生からみた今の薬剤師国家試験」

慶應義塾大学薬学部 3 年 村田俊介

今後どのようなカリキュラムに基づく、どのような薬剤師国家試験（以下国試と略記）が望ましいかを論ずるにあたり、まず医療人として相応しい質の高い薬剤師とはどのようなものかを定義する。私の考える質の高い薬剤師に求められる条件は大きく 3 つある。1 つ目は、常日頃から最新の医薬品情報を積極的に収集し、薬学に関する高い専門性の維持に努めること。2 つ目は、その豊富な知識を駆使し、様々な病的背景を抱える患者に対し最適な薬を迅速に提供できること。3 つ目は、医師、看護師などと積極的に連携して患者に対しより良い医療を提供できることである。

次に、これらの条件達成を目標とした時、現行のカリキュラムと国試で不足している点とその解決法について学生目線から提言する。

まず、カリキュラムに不足しているものは大きく 2 つあると考えられる。1 つ目は実戦形式の授業である。現在のカリキュラムでは、他学部 비해非常に多くの科目が存在するが、その多くが講義形式の座学のため、実際に学んだ知識を実践的に使う機会に乏しい。その結果、多くの学生が薬学の知識を有していても、それを実際の臨床現場に応用する光景をイメージできないという現状がある。当事者の私自身もこれを強く感じている。5 年次に実務実習があるものの、それだけで 4 年間学んだ全ての知識について確認できるとは考えにくい。よって、学んだ知識がどのように臨床現場で生きるかを積極的に考える機会を早期から定期的に設けることは、知識を実践に結び付けるといって非常に有用であると考えられる。2 つ目は医学部や看護学部との合同授業である。これは他の医療従事者の考え方を知る貴重な場であるが、現状その機会が圧倒的に少ない印象

がある。私の大学では 1, 4, 6 年次に 1 回ずつ医薬看の合同実習が行われているが、実際に参加した当事者からすれば全く十分とはいえない。今後、より一層地域社会に貢献していくことが求められている状況の中で、医療従事者間の円滑な連携を構築するために互いの背景を理解することは不可欠である。故に、今後こうした合同授業やグループディスカッションなどの授業を積極的に増やし、お互いを知る機会をもっと増やすべきであると考えられる。

次に、国試に不足しているものは大きく 2 つあると考えられる。1 つ目は、医療問題に関する小論文のような、学生自身の考え方も問う試験である。現在の国試は全てマーク形式であり、主に知識と問題解決能力を問う問題である。この場合、単純な学力については評価できるが、学生の人間性や考え方が薬剤師に相応しいレベルにまで達しているかどうかまでは評価できない。故に、医療問題に関する意見を問う小論文を国試に導入することで、学生の医療に対する考え方が薬剤師に相応しいものであるかを含めた総合的な観点から評価できると考えられる。2 つ目は国試後の免許更新である。薬剤師は常に新しい薬の知識を集め、高い専門性を維持することが求められているが、現状全ての薬剤師がこれを実践できているとはいえない。よって、薬剤師 1 年目に 1 回、以降 2, 3 年おきに臨床で使用する薬について筆記・実技を含めた試験を実施し、それに合格して初めて免許を更新できるようにする。これにより、より多くの薬剤師が常に専門性の維持に努めるようになると考えられる。また、得点が 90% 以上の人には 10 ポイント、80~90% の人には 8 ポイントといったように、得点率に応じてポイントを与え、ポイントが一定以上に達すると、優良薬剤師に格上げする。これは専門薬剤師のような付加価値とは異なり、薬剤師としてのベースラインの質をランク付けするものであり、薬剤師の意識向上に繋がると考えられる。

従って、冒頭で掲げた質の高い薬剤師を養成する上で、より実践を想定したカリキュラムに基づく、知識と人間性・考え方を総合的に問う国試が最も望ましいと私は考える。